127　○盃（杯）とはどのような枡目か

問　「白石市史」５の契約講史料の中に『清酒三十盃、す壱盃半、たまり三盃』などと書かれています。盃とはどのような枡目[(1)]なのですか。

答　わが国で用いた尺貫法の枡目の呼び名の一種で、２合半を１盃（杯）といい、実生活上、丁度適量な単位[(3)]なので広く使われたものです。しかし、言葉としての「○盃」は次第に方言として東北等に偏在するものとなり、通用語としては、「１盃」の別名「こなから」の方が残っています。

予め１升瓶とか、リットル瓶等の規格容器にパックされたものの取引[(4)]や、販売が行われる現代とはちがい、容器持参の量り売りが通例だった時代には、盃（杯）は人数分の目安をきめる最適の単位でした。「菅野円蔵翁郷土史物語」（菅野円蔵）にも、『１５歳になっと（なると）、本町（白石）では若い者として若者組に入った。そして若者組に入る時は清酒十杯（二升五合）持って行かなければならなかった。初めは一石が二円だった。……御維新当時の金持は山崎で、資産数十万円と評価され、仙南第一であった。店は呉服物を扱っていた。毎日百人ぐらいの使用人を置いて昼飯を食わしていた。……山崎は酒を十杯ぐらいやって一段歩の田をもらった。武士階級がなくなった時、百姓が田を預けられ、困ってしまって、旦那、上げましょう、ということになって、酒をやってもらったのだった。……』とあります。１盃（杯）の量をはかるためには、そのための２合半枡があって、それを用いたものです。度量衡器は法定のもので、枡の種類も「御触書寛保集成」の正徳辰年〔１７１２〕３月の条に、『１斗枡、７升枡、５升枡、１升枡、５合枡、２合半枡、１合枡』などとあります。

１盃（杯）を方言として扱ったものに「全国方言辞典」（東条　操編）がありますが、『いっぱい（一杯の意）二合五勺。盛岡・岩手・山梨・大分・熊本』と記しています。しかし使用範囲はこれよりも広く、「大辞典」（平凡社編）には『イッパイ一杯、一盃。方言。枡目の二合五勺のこと（東北地方）』とあります。勿論、仙台附近においても用いられてもいましたので、次の諸書を挙げて置きます。

1.　「大言海」（大槻文彦）

『いっぱい（名）〔一杯〕

二合五勺ノ称。（仙台）』

2.　「仙台方言考」（真山青果、「真山青果全集」第１５巻，新版全集第１７巻の内）

『いっぱいます

二合半、即ち一升の四分の一量を一盃枡と云ふ。甲州の古枡（こます）も一升の四分の一量の枡を、畑こ枡、四ツ入枡、又一盃枡と云ふ由。甲州古枡の一升は現時の枡の約三倍なれば、一盃枡は約七合五勺の量なれども、一升の四分の一の量たることは同一なり。……』

3. 「仙台方言集」（土井八枝、大正８刊）

『いっぱい（名）　一杯（二合五勺の量）

「醤油一杯下さい」「一杯枡（いっぱいます）』

4. 「仙台の方言」（土井八枝、昭和１３刊）

『いっぱい　エッペ（一杯）名　二合五勺の枡に一杯、即ち二合五勺。

「一升いっぱい」（一升二合五勺）

註。普通の家庭ではこの分量を基準とする慣しがある。但し五合は二杯と言はずに五合（ゴンゴー）と言ふ。「御飯三ばいたきすぺ」（御飯を七合五勺炊きませう）』

5. 「自伝的仙台弁」（石川鈴子）

『いっぱい〔一杯〕名

二合五勺。物売などがこの枡をもっていた。酒や穀物や硯〔蜆〕などをはかる。＝いっぺ』

6. 「方言」（藤原　勉、「宮城県史」２０の内）

『いっぱい　エッペェ

物をはかるに二合五勺を一杯と言う。土井「二合五勺の枡に一杯、即ち二合五勺。普通の家庭ではこの分量を基準とする慣しがある。但し五合は二杯と言はずに五合と言ふ」。したがって一杯枡は二合五勺入れのます。九州ではこの一杯をゴ一つと言い、このゴは盒〔ゴ〕で、食盒一つのこと、いにしえは盒器一つが二合五勺と一定していたのだという（大里武八郎「鹿角方言考補遺」）』

7. 「岩手方言集」旧伊達の部（小松代融一）

『イッパエ　二合五勺

エッペァ　二合五勺』

8. 「東北方言集」（仙台税務監督局編）

『いっぱい〔名〕

にがうごしゃく（二合五勺枡に一杯の意）〔二合五勺〕

いっぱい　いっぱい　又いっぱいで、都合七合五勺になる「宮〔城〕南、宮〔城〕北」』

注(1)　家の戸主（新分家や水呑、名子等は除外）で結成した地縁的な協同生活機構、契約また一揆ともいう。非常に固い団結をもち、葬式送りや屋根葺や会食などを中心とする規約をもっていた。

注(2)　醤油の一種。大豆を煮て麹菌を作用させ、これを食塩水に仕込んで醗酵させ、その液汁をとったもの。醤油より濃厚で美味であるが、芳香はない。醤油の方は小麦と大豆とで作った醤油麹と食塩水とを原料として醸造する。甘味と鹹味とを有し、特有の香気がある。

注(3)　昔の１人扶持は2.5合×２＝５合（１日２食時代）もその１例。

注(4)　「大辞典」（平凡社編）に『コナカラ　小半　四半分の義　一升の半分を更に二分したる

容積、即ち二合五勺。』

「大言海」（大槻文彦）に『こなから（名）（小半）〔半分、即ち、なからナリ。半分、又半分ナレバ小なからナリ。物ノ四割一（ヨツワリヒトツ）、又四分ノ一ノ称ニテ、四半分トモ云フ。小半（コナカラ）ノ字ヲ音読シテ小半（コハン）ト云フ、半升ノ半分ヲ、小半斤（四半斤）ト云フ、是レナリ。小半時（コハントキ）、豆腐ノ小半挺（コハンテウ）皆同ジ〕

（一）米、二合五勺ノ称、五合枡ヲなから枡ト云フ。

（二）酒、二合五勺ノ称。酒一升を一斤ト云フ、其小半斤ナリ。』

姓に「二合半」（こなから、こならか）があり、また地名にもある。「遺臣伝」（子母沢寛）に『牛込もちの木坂とお濠の上から上って来る二合半坂（こなからざか）のぶつかる角屋敷……』。「歴史の中の単位」（小皇袈裟勝）に『日本でも昔甲州には3升が1升の大ますがあって、その半分入りのますをなから、またその半分のますを小なからと呼んだ。なからはなかばを意味する甲信地方の言葉である。』とある。

資料　大言海（大槻文彦）

仙台方言考（真山青果、「真山青果全集」第１５巻、同新版第１７巻の内）

仙台方言集（土井八枝）

仙台の方言（土井八枝）

自伝的仙台弁（石川鈴子）

方言（藤原　勉、「宮城県史」２０の内）

岩手方言集（小松代融一）

東北方言集（仙台税務監督局編）

128　滝沢神社境内の芭蕉句碑について

問　滝沢神社の芭蕉句碑の句は、案内板の説明通りとすれば、季が合いません。確かに、芭蕉が此処を参拝した時の作なのでしょうか。

答　この句碑〔滝沢神社の「梅月碑」〕について、問題の案内板には、次の通りのことが記されています。

『蕉翁碑再元〔マヽ〕解説

俳聖松尾芭蕉が元禄二年五月奥の細道旅路の途に画工加右衛門（俳号和風軒加之）の案内にて滝